

歴史

古代ローマが訓えるもの

私は世界史の専攻でもなく、特にローマについて勉強した者でもない。そこで、ここでは手がかりとして塩野七生しおの ななみ女史の「ローマ人の物語」と英国の歴史家、E・ギボンの「ローマ帝国衰亡史」を参考にローマ史を考えてみたいと思う。

「ローマ人の物語」は一九九二年に第一巻が刊行され、十五年後に完結した。私は塩野さんが広大なスケールで、描いたこの書を読むに至って、改めて古代ローマという国に深い関心を持った。古代ローマと言えば、歴史家、作家、評論家を問わず高校生に至るまで、完璧に近い国家を創った国として深く脳裏に印象されている。政治組織、経済力と壮大なインフラの整備、揺るぎない軍事力の維持、そして、何よりも多彩な文化と哲学を生んだ国家として認知されているのである。

ところが、不思議なことに、多くの評論家は、古代ローマ史の視点を国家草創期や隆盛期には触れずに神話や伝説は読み物としては面白いが現実味に乏しいためか、あの強大な理想国家が何ゆえ滅びたのかという終末論に終始していることが多いのである。最初に思いつくのは、英国のE・ギボンである。わが国においてもギボン

と同じように、滅びゆくローマの姿を多くの学者が克明に分析している。書名は省略するが、故、高坂尨、故、司馬遼太郎氏等が、やはりこの衰亡の諸因を考察している。

衰亡とは盛期を前提とした相對視野で捉えたものであることは動かせない事実である。「ローマは一日にして成らず」は有名な言葉であるが、「パクス、ローマナ（ローマの平和）」に至る道程は決して平坦なものではなかったに違いない。ローマ人が自ら認めていたときれる「知力ではギリシャ人に劣り、体力ではケルト人（ガリア人）やゲルマン人に劣り、技術力ではエトルリア人に劣る」としながらも、ローマは紀元前後二千年にわたって当時のヨーロッパに君臨し続けたのである。塩野女史はこれを膨大な資料と自らの現地調査によって、編年体という流れの中に紀伝体という大小の堰を設けながらその興亡を透徹した目で描き、見事に解析して見せてくれた。それが「ローマ人の物語」である。ローマ史はあらゆる点で興味は尽きない。そして、私は「ローマ人の物語」を読む度に、どうしても日本の過去と現在、それに続く未来を重ねて考えてしまうのである。現代の日本は表面的には自由と平和の中で、高慢と懼れが入り混じり、まるでテーマも主題も、色彩までも失った画家の描いた絵の

ような国になってしまった。歴史も人の一生も同じようなものかも知れないと思ったりもする。もう一度絵の具箱からエーゲ海の純粋なコバルトブルーを探してみる必要があるようだ。

わが国が明治維新を迎えたとき、老いも若きも身分や家柄にこだわらず、日本の存亡の危機を意識し、自分の置かれた立場でお国のためにと献身した。つまり、江戸幕府が倒れて初めて日本人は、自分が日本国民のひとりであるとの自覚を持ったのである。しかし、当時の植民地時代の四海は波高く、事情はともかく、日清、日露、支那事変と矢つぎ早やに戦は続き、遂には米国と事を構えることになってしまった。東海の小国日本は、独立国として自立の道を選んだ。しかし、この悲劇は日本史の中に消すことの出来ない汚点として残った。これは当時の為政者の無策もさることながら、マスコミが国民を扇動したというプロパガンダの責任は重い。

敗戦は負の遺産を沢山残したが、日本国民は歯を食いしばって耐えた。丁度この時期、南北朝鮮で戦争が勃発した。これを朝鮮戦争特需と云って「日本の奇跡的な復興は朝鮮戦争のお陰だ」という当事国の人もいるようだが、公平に見てこの位置に日本国が無かったなら、南朝鮮は北朝鮮の猛攻撃で海に追い落とされボートピープル

となっていたかも知れないのだ。この危機は子ども心にも恐怖として印象されている。しかもこれは、二大強国の代理戦争でありながら六十年を過ぎても終息を見るどころか、今や一方は核兵器をちらつかせて激化の一途を辿っている。断片的に見るテレビニュースでは南北の経済格差は極めて大きいものがあるようだ。かつての日本がそうであったように敵愾心や武器だけではその国の命運は脆うくなる。歴史的にはアレキサンダー、スパルタ（ラケダイモン）中世では仏国のナポレオン、近代では独国のヒットラー、日本の軍部が同じ運命を辿ったではないか。当然のことながら国が減じる理由は軍事力、作戦力、兵士の士気、国の経済力、国際的な信用力等々数えあげれば切がない。しかも優勝劣敗は、数量化できない差によって生じる。かつては世界の半分を席卷した大航海時代の西欧諸国は、今や人種問題と負債大国として悩んでいる。国家も個人の盛衰と同じように輪廻を繰り返していると思えない。結局、中庸は一見退屈なようで、国家安定の要諦なのだ。貧富はその国独自の基準で決められる。しかし、天の秤はかりで見たならば分胴は必然的に民衆の声の大きい方に軍配が上がる。しかし、ここに落とし穴が潜んでいるのである。逃げ場がなく声も出せない民衆の選択は唯一つに収斂す

る。自分の国に理解を示さない諸外国が悪い！となる。民主主義にも欠陥はあるが、一つだけ素晴らしい特質がある。自由という保障である。この自由こそが中国の戦国時代に「孫子」によって記された「圉師必闕」という四文字の中に凝縮されている。つまり、人を導いたり、教えたりするときには、必ず四辺の一边は開いて置くという極意を使うというものである。法は万能ではない。たとえばどのような理想国家でも、不満分子は居る。しかし、人間という生物は、自分の意見を吐露できればある程度我慢も満足もできる。一党独裁は時限爆弾を抱えて政治を行っていることに他ならない。

私は今、冷静に現実の世界を見渡してみても、カルタゴの勇将ハンニバルの言葉を思い浮かべないわけにはいかない。「いかなる強国といえども、長期にわたって安泰であり続けることはできない。国外に敵はなくなっても、国内に敵を持つようになる。それは身体の疾患に苦しまされることに似ている・・・」この言葉は心を抉る。

この短い片言によって古代ローマの凋落が見える。